香取遺産 Vol.45

「大法寺古墳・権現前古墳」

大須賀川流域の歴代首長墳墓

▲大法寺古墳（東から）

大法寺古墳と権現前古墳は森戸地区にあり、前回の香取遺産12月15日号で紹介した禅昌寺山古墳と同じく、大須賀川下流地域を支配した歴代の首長墓と考えられている古墳です。

大法寺古墳は、大法寺の境内にあります。その頂には御堂が建立され、かなり高さのある円墳のようにみえますが、周辺の地形などの観察から、全長約60ｍの前方後円墳と考えられています。西側が前方部、東側が後円部で、主軸方向はほぼ東西です。

現在残っているのは後円部で、大きさは直径32・5ｍ、高さ6・5ｍです。前方部は、宅地開発などで失われてしまいましたが、後円部は御堂があるため削られることなく残ったのでしょう。

権現前古墳は、大法寺古墳から東へ約500ｍの所にあります。墳丘はすっかり失われ、現在は畑地と宅地になっていますが、大法寺古墳とほぼ同じ大きさの前方後円墳と伝えられています。

両古墳とも、埋葬施設の構造や副葬品はわかってはいませんが、古くから墳丘やその周辺から埴輪が出土することが知られており、大須賀川下流域における重要な古墳であると認識されてきました。これまでに採取した埴輪から、大法寺古墳が6世紀前半、権現前古墳が6世紀初頭の築造と考えられます。

この他にも、円墳が数基あったと伝えられていますが詳細は不明です。

大法寺古墳と権現前古墳がある森戸地区は、台地の裾部にあたる標高約3ｍの微高地で、大須賀川下流に広がる低地に面しています。その低地は古くから水田として利用されてきました。

このような微高地に歴代首長の墳墓が営まれていることから、当時すでに重要な生産基盤として水稲耕作が行われていた可能性がうかがわれます。

本地域の首長たちは、死後もなお、大切な水田を見守っていたのでしょうか。

問い合わせ
生涯学習課 ☎(50)1224